Forbidden Lovers
- For Adult Only -

Uh...
Excuse me...
.....?
Umm,
Could we... have a moment of your time...?

Forbidden Lovers

そりゃないよufoさん。

…絶望した!!　劇場版6章の、礼園の制服に素足という組み合わせに絶望した!!!!
本音言うと、式にだって常時足袋着用を義務づけたいくらいなのに、礼園の制服に素足はちょっとコレ頂けないですよ！と言うわけでうちの式さんと鮮花さんにはそれぞれ…ーソとタイツを。この制服ならまず間違えなくタイツorパンストを推したいところですが、2人して同じっていうのも味気ない…ということで。
式 with ーソ with ガーターベルト　式なのにガーターベルト　このミスマッチっぷりが個人的にツボったのであります。それにほら、この制服一式手配したのは。

恐らく絶対橙子さんですよ！（凄い説得力）

意味でこれくらいやりますって！私好みの可愛い子でラッキーじゃん！ですよ！
あとはまぁアレです。私としては式のパンストを裂く役は黒い人にプレゼントしたいってのが本音だったり（笑）

あ、スミマセン、つい冒頭から礼園制服萌え語りをしてしまいました
初めましての方もそうでない方もこんにちは。6章を4回見に行ったいづみやです。
鮮花×式です。ある意味義姉妹です。百合です。エロです。やっと出ました。
…そろそろ、らっきょ原作を心から愛してる人に石を投げられそうで怖いのですが…
ufoさんが6章を色んな意味で思い切りやってくれたので、私も思い切りやってみました（笑）勇気をありがとう！公開されるまで焦らされるのを待った甲斐がありました！
最初は「YOU！兄嫁寝取っちゃいなよ！」という如何にも恥ずかしいタイトルで笑ってごまかす感じのエロコメ本にしようかと思っていたのですが、OVOの一同一答で奈須氏が「式は鮮花が女友達として大好き」とか煽るから…っ　思いの外リリカルでパラレルな内容になりました。割り切って読んでください。
というか式を愛でるフリをして鮮花のツンデレっぷりを愛でてしまった。ツンデレ×ツンデレって超美味しいですね。楽しかった！
ご覧頂いている方にもお楽しみいただければ幸いです。

余談ですが、昨年末の冬コミの時に美沙夜のコスプレをされたお嬢さんが当スペースにいらしてくださいました。つい「美沙夜ですよね！素敵です！」と声をお掛けしてしまったのですが、本当は「良くってよ！良くってよ!!美沙夜様！」と言いたかった（笑）ネタが通じなかったら唯の失礼な人になってしまう…と思い自重しましたが。
この場を借りて。「良くってよ！良くってよ!!」
あのシーンは美沙夜の高笑いとBGMが相まってもの凄いテンション上がります。

2009年2月　いづみやおとは

Hey, Shiki!
Just where did you run off to!?
?
...No-where in parti-cular?
I only wanted to take a look through the window.
You know...
I told you not to go strolling around on your own!!
Give me a break...
It's not like I'm doing you any harm, is it?
That's not the point here...

Ah,
Some students gave this to me a moment ago.
Hmm?
...
What's that?
I've heard rumours before, but ...
To think things like this really happen between girls in all-girl schools...
Did you get any as well, Azaka?
I wonder ...
Could it be that 'love letter' thing?
...What?
Well, I thought you'd be the popular one...
You are actually cute as long as you keep quiet, did you know that, Azaka?
I don't like it, this feeling...
Why...?
...
How...

Isn't she the person I hate the most?
Huuh?
It's not like I asked for it, you know!
I didn't see any reason to decline... Wouldn't you have accepted it as well, Azaka?
In fact, I think it's quite convenient if both partners are women.
Oh, but you do pay attention to 'taboos' and such, right?
This...
It feels almost like...
How can you accept something like this without thinking...!
...Shiki,
You've come to Reien as my eyes...
You should consider that before you act on your own!!
...Oh no, just what am I saying?
Isn't she the pesky adulterer who stole Mikiya?

You should try hooking up with one of the girls here instead ...
!?
Jealousy.
...
Ahh, this is no good.
Even though my mind says, "Don't do it"...
Shut up, idiot Shiki.
Because... It's all your fault, understood?
...What's with the violence...
I don't remember asking you to make a move on me.

My flesh is over-come with yearning ...
For the lusclous 'forbidden fruit' that unveils before my eyes...
... 'Cause I'm not giving you away!...
Not even to Mikiya ...
Ah! Such decadent pleasure...

...
Ah...
Mm!
Mm...!
Mm...
Mmf!
Ahh...
Ah!
Mmph...
...!
...
Hey, you
...
Wear a bra...
at least...
More impor-tantly...
That's... none of your business ...
You are heavy...

Then how about you try and fight back a little?
For someone of your ability
killing me should not be too much of a difficulty?
What's with her expression...
Very well.
I hope you can stand up to your words...
Having been told something like this ...
Cause if you break down crying and apologizing,
I won't forgive you...
It's not like...
...I am opposed ...
...to engaging in this with you...

Ah!...
Mm
Aah...!
Oh...
How could I possibly restrain myself now?
...
Aza...
Uhh...!
Mm...
Uuh...!
ふるふる...
Huuh...
I'm a little surprised, Shiki...
So you can make sounds like these, too...
Uhh!...
Mm!
Aah!...
I can't help it ...
'Cause it feels good...
...
Shut up...
Aah!
Ah!

Uhh...
Ah... Aah...!
Ahh
Azaka... I can't...!
あっ
あぁぁぁぁっ♥
ぐぐぐっ
……っ
Darn it...
Guess I can understand Mikiya's feelings...
……？
...
Although it's painfully hard to admit...

You are a girl, too...
...Shiki.
And not only that...
You're so beautiful, it makes me mad...
Hey...
When for once you're being praised,
you should be polite and show some gratitude...
Beautiful, you said!...
Are you trying to... make fun of me?...
...
Azaka...

You...
In your case, there's no way anyone could not recognise you as a woman...
Hey,
Shi... Shiki...!
...Look,
Wouldn't that be you, Azaka?...
Huh?... Wait...!
Kyaa!?
Ah...
Even your breasts... are bigger and softer than mine ...
Oh... So that's been the thorn in your side?
Shut... Shut up ...
Fu fu fu...

Mm...
Ah!
Aah!
Not... there...!
Mm!
Uuh...
Mmph!...
Aah...!
Mmm...
Uhh!...
I can... make you feel even better...
Ah...
Azaka!
Are you there yet...?
I like this voice, Shiki!...
Uuhh!
Mm...
Ah!
It's okay... Don't hold it in...
Shiki...!
Aah...
Azaka...
Aza...!

Azaka...
...!
Ah...
Shiki...!

Yeah. I get it...
...Ahem.
Shiki.
I hope this is clear, but...
"Don't tell Mikiya about today" is what you wanted to say... right?
If.
If you let it slip...
I won't go easy on you, do you hear me?!
I'm not gonna tell him.
...How could I ever, anyway?

Huuh.
But, you know...
Thinking of it now...
...Of all women,
the thought of you being with Mikiya distressed me the most.
...Shiki.
Hmm?
...Forget it.
Whaat?
Hey, Azaka!
After you've piqued my interest...
You can't just start talking and break off like this!
No way...
It's too shameful, after all.

Come on, Shiki!
Pull yourself together already!
We've got work to do, haven't we?
...Yeah.
It's much too shameful, so the words...
"Be it to Mikiya or anyone else,
I'm never gonna let you go"...
...You are definitely not going to hear that from me.
Fin.

Special Thanks：来夢 様
||しい中ケストありがとうございました！　ご馳走様てあります！

Forbidden Lovers

the Garden of sinners FanBook 06

発行日：2009/02/08
発　行：アルカロイド（いづみやおとは）
印　刷：金沢印刷様

18歳未満の閲覧・購読を禁じます。（高校生不可）
無断転載・転写・複製・アップロード・ネットオークションへの出品等を禁じます
メールでのお問い合わせの際は、お名前と日本語の件名を忘れずにお願い致します
乱丁・落丁などございましたらご連絡下さい
その他、ご意見ご感想など頂ければ幸いです。

Mail: noir-io@mail.goo.ne.jp
HP：http:/ alkaloid.lovepop.jp

「　なんだ、居ないのか」
昼過きに目が覚めてしまい、外へと出た。かといって特に行くあてもなく、ふらりと立ち寄った伽藍の堂には人の気配が希薄だった。窓際の定位置にこの事務所の主人であるトウコの姿はなく、唯一の社員である物好き――鮮也の姿もなかった。
まあ、本来なら世間一般で言う休日である今日、いるはずもない。
――のだけれど
『ごめんね、式。明日なんだけど、所長からどうしても外せないっていう仕事の手伝いを頼まれちゃったんだ。いや、あれはもう脅迫だね、うん』
昨夜、電話越しに心底疲れた声でそう告げた鮮也の言葉によるならば、二人の姿がないのはおかしいはず。
一歩、踏み込んでもう一度ぐるりと事務所の中を見渡す。雑然と散らかった室内は、鮮也が働くようになって大分片づけてられマシになったというが――それでもこの有様であると思うとその前かどんな惨状であったかなんて、考えたくもない。とにかく、物が多すぎる。
「――ん？」
ふと、微かに人の気配を感じて視線を向ける。
来客用のソファー。入り口からは死角になっていたそこに、人影がひとつ。その後ろ姿には見覚えがあった。
「――鮮花？」
小さく呼びかけるが返事はない。反応がないことを訝しく思いながら回り込んで正面から確認すると、すぐに疑問は氷解した。
「なんだ」
返事がないのも、気配が希薄だったのも当然だ。
視線の先ではソファーにもたれ掛かり、トウコでも鮮也でもない第三者――黒桐鮮花が、あどけない寝顔を晒していた。
そのすぐ前のテーブルの上にはくしゃくしゃになった紙があった。なんとはなしに手に取り、伸ばして開いてみると殴り書きのような文字が現れる。
【鮮花へ。すまん　どうしても外せない急用が出来てしまったので今日の講義はなしだ。ついでに黒桐も借りていく。許せ。
追伸。此処に来れる物好きなんて滅多にいないだろうが念のため、留守番を頼まれてくれると師としては大変嬉しい。】
ああ。このトウコから鮮花への書き置きを見れば解る。
鮮花にとっては貴重だろう休日。遙や学園を抜け出してきてみれば、約束してた講義とやらをすっぽかされたあげく、たまにしか会えない幹也まで連れて行かれて居ないときた。そりゃあ八つ当たりで書き置きをこんな風にして不貞寝もしたくなるだろう。少しだけ、鮮花に同情した。
ともかく、トウコと幹也が揃って留守にしていることはわかった。
暇っている鮮花は二人の帰りを待っている。
さて。なら私は、どうしよっか。

此処で鮮花が目覚めるまで待つのもいいか。どっせ　他に行くあても目的もないんたしお互い、すっぽかされた者同士　あてつけがましく此処で待ってるのも　裏たろう。
それに、鮮花か目覚めれば退屈だけはしないですむだろうし。
「よし」
決まった。私は鮮花が眠るソファーの反対側の端へと腰を下ろした。
他に見る物もないので自然と視線は鮮花へと向く。
あどけないその寝顔は　起きているときのせの強さを感じさせない年相応の可愛らしいものたった。
いつもこうだったらいいのに――一瞬だけ、そんなあえがよぎったけれど、すぐに思い直した。
慈々として大人しい鮮花なんて想像するだけで鳥肌モノだ。
うん。やっぱりいつも通りの鮮花がいい。
目覚めて私を認めた瞬間の、慌てふためくに違いない鮮花の様子を想像すると自然と頬が緩んだ。
鮮花のことだからきっと冷静に混乱しつつも噛みついてくるに違いない。
そう、いつだってこの少女は何かと私に対して突っかかってきた。
私が張り巡らせていた境界を踏み越えて、言葉と感情をぶつけてきた鮮花。
両儀式はそんな風に煩わしいのは嫌いたった筈なのに――いや、今でも間違いなく嫌悪しているのに。
鮮花に関してだけは不思議とそんな気分にならない。
むしろ、心地よいとさえ感じる瞬間がある。
それはきっと　鮮花が私に対して真っ直ぐだからだと思う。
遠慮のない言葉。真っ向から私に突っかかってくる鮮花には嘘がない。
裏表のないその存り方。
私に喧嘩を売る言葉――否定する言葉もそうだ。そこに陰険さや陰湿さはなく、明快でいっそ爽快なほど。だから後も引かないし、本気で怒りを覚えることもない。
今では鮮花と交わす物騒なやりとりは揆拗みたいなものだ。傍で聞いている幹也にしてみるとものすごく心臓に悪いらしいが　私は密かにそのやりとりを楽しんでいる――まるで、普通の女人同士が交わすような会話を。
――どうやら、私は自分で思っている以上に鮮花のことを好ましく思っているらしい。今更ながら自覚した。
そうしてまたぼんやりと鮮花の寝顔を眺めながら　とりとめもないことを考える。
思えば、黒桐の名字を持つこの兄妹は両儀式にとって数少ない対等に話を出来る相手なのだ。
人間嫌いの両儀式か　誰とも関わらないようにと敷いた境界を踏み越えてきた他人。
多分　もしかしたら、この胸に空いた穴を埋めるために必要な誰か。
幹也は私を肯定することで　輪から外れたつもりで居た私の自閉しを取り去ってしまった。
鮮花は私を否定することで　私がそれでも輪の中に居ることを逆説的に認めていた。
静と動。肯定と否定。ベクトルを真逆にしながらこの兄妹は私を認め、受け入れている。
――本当に、愚れ入る。
この兄妹は全く正反対のアプローチで、全く同じことを私に伝えてくるんだから。
――それも　当たり前のようにして。
「――ふふ」
なんたか妙におかしくて、思わず笑った。私に関わろうなんて物好きな時点で、きっとどうしよ

うもないほどに鮮也と鮮花は兄妹なんだろう。
それに今は閉じられた瞼のせいで見えないけれど　物怖じもせずにこちらを見据える澄んだ黒瞳か本当によく似ていると思う。
飽きもせずに私は鮮花の寝顔を眺め続ける。
その寝顔が余りにも気持ちよさそうなせいか、やがて私にも睡魔が襲ってきた。
基本的に依行性のせいか、この時間に眠くなることはおかしいことでもない。
此処にいるのがトウコだったなら、眠るなんて選択肢は絶対に須臾被るところなのたけど
鮮花なら、いいか。
数瞬の逡巡の後。あっさりと思考にカタは付き、私は睡魔に身を任せて瞼を閉じる
すぐに真っ逆さまに墜落していく意識で、最後に思った。

――こんな風に。
緒にいてもいいたなんて思えることが、キセキみたいなんだってことを。

へ

目を開けて　視界に入ってきたのは憎き遠敵の寝顔だった。
「　はい？」
その　あまりにもワケがわからない状況に間の抜けた声をもらしてしまう。
え、ちょ、なんで式が？
たって此処は確か橙子師の事務所で。　って、あれ？
「――わたし、寝ちゃってたんだ」
呆然と呟いて、当たり前のことをようやく把握した。
で、寝てる間に式がやってきたと。落ち着いてみれば式が此処に居ること自体はそう珍しいことじゃない。
わたしが橙子師に弟子入りしてから、何度となくこの事務所には訪れているけれど大概いつも式の姿はあった。
　流石に眠っているのは今日が初めてだけど。
いや本当、なんだってこんなところで寝るのかこいつは。
驚きと混乱から立ち直り、改めてまじまじと式を観察する。
いつも通りの和服姿。中性的な顔立ち。まるで彫刻のように微動だにしない式。
――それは静謐な眠りだった。
まるで、死んでもいるような――って　何を馬鹿なこと考えてるんたろっ　わたし。まだ寝ぼけてるのかしらと軽く首を振って浮かんた考えを脳裏から振り払った。
ほんと　馬鹿馬鹿しい。よく見なくたって式の肩は呼吸に合わせて微かに上下してるし、寝息だって聞こえてる。
「――」
ああ　けれと　見ているこちらまて目を詰めずには居られないほどに　式の眠る様は静かだった。
触れたらその瞬間に崩れ落ちてしまいそうな儚さ。脆いからこその危うい美しさ。
認めるのは本当に癪て仕方ないけれど、両儀式というカタチは綺麗たった。
例えるならばそれは　抜き身の日本刀のような。
　そう　どこかで他人を傷つけ拒絶する鋭さを式は持っていた。
けれど、今目の前で寝顔を晒している式からはその鋭さはあまり感じられない
あーもう。本当に解らない。なんでよりにもよってわたしの目の前でこいつが無防備に寝てるのかが。
といっか　勘弁して欲しい。これじやまるて式がわたしを信頼しているみたいじゃない。わたしにとって式は鮮也を巡るライバルて　憎むべき相手だっていうのに。
　――なのに　こんな無防備すぎる姿を見せられるなんて、困る。
って、ちょっと待った。
うっかりしてたけど　この状況はわたしの寝顔もばっちり式に見られてたってことじゃない　っ
あまりの不覚っぷりに真剣に頭を抱えた。
うう、バがあったら入りたい。
これも全部式が悪い――八つ当たりめいた感情を込めて、式を睨みつける。
と、
「――う」
ついさっきまで彫像のようだった式の寝顔に変化が見えた
眉間に深い皺が刻まれ、表情が歪む。なんだか酷く魘されているようだ。
「　式？」
その様子があまりにも苦しそうだったから思わず手を伸ばしていた。
指先が式の肩に触れるか触れないかの刹那。
「――ノー」
弾かれたように式の閉じられていた瞼が開き
「え――？」
くるんと回った視界。闇の抜けた自分の声を　わたしは他人事のように聞いていた。
背に軽い衝撃。
――気がつけば　わたしはソファーの上で式に組み伏せられていた。
とっさに押し退けようと身体を動かそうとして、ちくりとした痛みを感じて硬直する。視界の端式が逆手に持ったナイフが喉元に突きつけられているのが見えた。
うわ　これ下手に動けば冗談じやすまないことになる。
「ちょっと式　なんの」
つもりよと竪鳴ろうとして、言葉にならなかった。
わたしに馬乗りになったままの式と目を合わせた瞬間。込み上げていた怒りも何もかもが霧散した。
「――っ」
息を　呑んた。
至近距離、式の視線に射抜かれて。
わたしは　暫らく　この時初めて両儀式の本性を直視した。
その　光を孕つ蒼い魔眼を。
式にその気があったかとっかなんて、わからない。けど　思った。ああ、わたしは殺されるんだ

なって 当たり前みたいに受け入れていた。
透明な殺意。それがそのままカタチになったみたいな瞳
いつの間にか手品みたいに喉元に突きつけられていた見慣れたナイフの刃より、その瞳に殺されるんだって思った瞬間。
――しゃあ、しようがないか。なんて、わたしは思ってしまった。多分、あんまりにもキレイだったから。
そう 恐怖はなく。ただ、見惚れていた。
目を逸らすことがどうしても出来ないまま、わたしと式は見つめあった。
一秒か、数分か――。
麻痺していた思考が再起動し始めるにつれ、今のこの訳の分からない状況への怒りが再び沸き上がってくる。
なんだろう、飼い犬に手を咬まれたらこんな気持ちになるのかもしれない。少しだけ、裏切られたような気持ち。
それを認めるのがまた癪で、とにかくこれ以上式の瞳に呑まれまいと負けじと視線に力を込めて見つめ返す。
――と。
鮮花、とようやくわたしを認めたのか。唇がそう動いたような気がした。
さざ波一つ立ってなかった式の瞳 無機質な熱を帯びていたそれが、急速に醒めていく
代わりに瞳に浮かんだのは微かな狼狽――いや、これは怯え？
たにか、ほんの弾みで取り返しのつかない失敗をしてしまった時、或いは隠し通したかった恥ずかし親にばれてしまった子供がその瞳に浮かべるような色。
確かに式の瞳は揺らいでいた――それも、一瞬。
すぐに元の無関心さを取り戻そうとして――失敗した。多分、本人はいつも通りを装えてるつもりんたろうけど、だけど違う。風いだ表面の下、未だに波が荒れ狂っているのがわかってしまった。
それで、理解した。今のこの状況は式にとっても想定外の、出会い頭の事故みたいなものだってことを。
だから、わたし以上に式はどうしていいかわからないんじゃないだろうか。
なんとなくそれがわかってしまったからたろうか。わたしはこのあと放たれた脈絡のない式の言葉に、そんなに驚きはしなかった。
「――あざか」
呼ぶ声にはどこか硬質な苦みか滲んでいた。
無数にヒビが入って今にも砕け散りそうな硝子を想起させる。
「おまえは、オレが怖くないのか」
そう問いかけてくる式はやっぱりいつもの、何もかもに無関心そうな表情なのに
どうしてだろう。今にも泣き出しそうな子供みたいだなって、思った。
『いつも怪我をしそって危なっかしくて、放っておけないからね』
――不意に いつか式のことをそう語った兄の言葉を思い出した。
その時は笑い飛ばした

今は。笑えない。いっそ悔しいくらいに。その言葉は真実だったと実感してしまったから。
感情の見えない瞳の奥に 親とはぐれて途方に暮れてる迷子みたいな式を見つけてしまった。
ああもう、本当に我慢ならない あと 秒だって目の前の相手にそんな表情をして欲しくない。
だから、言ってやる。
「ばか式。そんなくだらないこと訊く前にとっととその物騒なものを仕舞ってよね」
「――あ」
夢から覚めたように式は目を見開き、一瞬の間をおいて、ナイフが床に落ちるカンヤンという音がした。
けれど、それだけだった 相変わらず式はわたしの上から退かず ぼんやりとわたしを見下ろしている。
どうもまだ、悪い夢から覚めてないみたいね。
はあ と溜息をつき、わたしは動かせるようになった身体に力を込める。
「とっとと――」
言いながら、式の頭を撫でるようにして腕を伸ばす。
触れる直前、瞬だけ躊躇した。けれど式は拒もうとする仕草は見せず、訝しげな色を浮かべるだけ。
それで、覚悟は決まった。あとは腹筋と腕に渾身の力を込め、一瞬後の痛みに耐えるだけ――
「起きなさいってのよバカ式――」
「――なっ」
ごちん と。鈍い音がわたしと式の頭から生まれた。
今力全開の頭突き。
流石にこれは覚悟も予想もしてなかったろう式は、わたしの上から転げ落ち、床に膝を付いて声もなく悶絶していた。
「痛っ――、おまえな いきなりなんてことしやがるんた」
恨みがましい抗議の言葉に せいせい憎らしく聞こえるように答えてやる。
「ふん、ノョック療法ってやつよ。どう 少しは目が覚めたんじゃない？」
「――む」
さっきまでの己の醜態を思い出したのか、式は眉ねを寄せた。バツが悪そうに視線をわたしから逸らす様子は 今度こそいつも通りの式だった。
そのことにほっと息を吐く。それがどういった感情に因るものなのかは、自分でもよくわからないけど。
「鮮花」
むむむ、と唸っていた式が姿勢を正してわたしに呼びかける。
「――その、」
多分、謝ろうとしたんだろう式の言葉を遮る。
「あー事故よ。事故。出会い頭の正面衝突。気にしてなんかないわよ」
上半身を起こしながら言う。
そう、多分ただ間が悪かっただけなのだ。本当にわたしは式に対して怒ってはいない。
「たから式も気にしないでいいわよ」
「――鮮花」
わたしの言葉に式は納得出来ないようたった。

「それでもオレは、おまえを殺してしまうかもしれなかったのに　」
消え入りそうな声で、式は言う。
確かに殺されるかと思ったけど、それでも。
そんなことより、今こいつがこんな表情をしている方が頭に来ているわたしはどこかおかしいのかもしれなかった。
「――ああもうまったく、なんでわたしがこんなこと言わなくちゃならないのよー」
踏ん張り上がる苦立ちに任せて頭をかきむしる。
わたしの突然の激昂に驚いている式に、びしっと指を突きつける。
「わたしが気にしないって決めたんだからあんたが気にすることもないのー
あんたが危ない奴だってのはとっくに知ってるんだからー
というか、あんたがそんな調子だとわたしが色んな意味で困るんだからしゃっきりしなさいー」
特に今は主にわたしの起源のせいだと思いたい感情のせいでー
言いたいことを全部言い切って肩で息をしてると、わたしの言葉を咀嚼した式が首を傾げた。
「困るって、どうして？」
「ぐ」
いやその、どうしてって――困るものは困るんだってば、バカ式。
だって目下のところ黒桐鮮花は
「両儀式をこてんぱんにすることが目標なんだから　対象であるあんたにはふてぶてしいくらいで居てもらわないと張り合いがないじゃないのよ」
そう、だから両儀式には憎たらしいくらいで居てもらわないと困るのだ。
じゃないと、わたしはこの感情をどうしていいのか本当にわからなくなるだろうから。
「ということで、わたしはあんたなんか怖くないの。それからあんたにはいつも通りで居てもらうんだから。文句ある？」
なんだかもう自棄になって式を睨みつける。よく考えなくても本人に打倒を宣言してしまったカタチだ。場の雰囲気に流されたとはいえ馬鹿正直にも程があるでしょうよわたし　ー
で、その打倒を宣言された式はというと。
目を丸くしてきょとんとした後、くっくと、俯いて小刻みに肩を震わせはじめやがりました。目尻には涙さえためてるっぽい。
「　改めて、本当に思い知ったんだけどさ、鮮花」
「なによ」
表情は見えないけれど　声で笑っているのが解ったから憮然として応える。
式は俯いていた顔を上げ、わたしと視線を合わせてきた。
「オレ　おまえのそういうところが凄く気に入ってるみたいだ」
「なっ」
その、式に似つかわしくない言葉と　初めてみるような優しげな眼差しに不覚にもし鼓が跳ねた。
多分、認めたくないけど嬉しも真っ赤だ。それくらい　今のは予想外の不意打ちだった。
なんのてらいもない真っ直ぐさ。そんなの、卑怯すぎる。
「な、なな、何を言い出すのよこのバカ式　ノ！」
これ以上こんな式の前にいたら取り返しのつかないことになってしまいそうで　わたしは式に背を向けて駆けだした。
呼び止める式の言葉はもちろん無視。

途中　色々なところにぶつかって盛大に部屋を散らかしてしまった気がするけどそれも考えないようにした。
今はとにかく式の前にはいられない。
部屋を飛び出し、叩きつけるようにドアを閉めた。視界から式が消え去ったことでようやくわたしは少し冷静さを取り戻す。
「　ああもう、本当に」
ドアに背中を預けてずるずると座り込んだ。
火照った頬と、未だ静まらない鼓動。その、音吠。
「なんだっていうのよ――」
呟いて、今度はわたしが遠方に葬れた迷子のように空を見上げるのだった。

――鮮花は知らない。
穏やかに、愛おしむように紡がれた柔らかな声を。
「　本当にありがとう、鮮花」
それは何も飾らない今の彼女本来の、素のままの言葉だった。

――そして。
ほどなくして帰ってきた檀子と幹也の二人は　部屋の前で真っ赤な顔で頭を抱えてへたり込んでいる鮮花と、部屋の中には傍目にも一目で解るほどに上機嫌の式を見つけて首を傾げることになるのだが　それはまた別のお話。

終

式と鮮花への愛はこれでもかと詰め込みました。
良ければ感想下さると狂喜乱舞致します切実に。

来夢／サークル　宿命廻路

http://sadamekairo.K-Free.net/
gensoumugendou@yesta.ccn.ne.jp

Forbidden Lovers
the Garden of sinners
- For Adult Only -
20090208
Presented by Alkaloid

Wings of Yuri

Raw provider	/u/
TL/Editing	Winterbraid
TL Check	Shijima

http://www.solelo.com